カエル

田中浩司

甲府市の健康検査で、右腎臓に二十八ミリの腫瘤の疑いがあるという通知が来た。ただちに精密検査を受けて下さいという内容であった。

私は、いつも行く病院へ電話をして、三日後に予約を取った。

それまでの間、私はとても不安であった。腎臓が癌なら他の臓器とは違い、すぐに死につながり、一〇〇パーセント助からないということを知っていた。母は、目が赤かった。まさか母が泣くとは思いもしなかった。母はもう高齢なのであまり感情はなくなっていたのだが、私は嬉しかった。それから、ごはんも喉にはあまり通らず食欲は落ちた。手も震えた。

病院へ行き、診察室へ入ると、主治医から「突然できる瘤は悪性です」と言われた。超音波室へ行き、エコーで見ると、やはり瘤はあるような感じで、看護師が画像を見て寸法を測っていた。

エコーが終わると私は看護師に「瘤はありましたか」と尋ねた。看護師は「先生に聞いて下さい」と言った。私は肩を落とし超音波室を出た。

主治医がいる診察室に入ると、「この瘤は二十二ミリだよ。ただ、癌の場合腎臓の血流は悪くなるけど、血流は普通です。この瘤はおそらく脂肪の塊でしょう。九〇パーセント安心して下さい。ただまだ癌の疑いがあるから定期的に来て下さい」と言われ、私はとてもホッとした。

家に帰ると母は心配な顔をしていた。私が事情を話すと、母も安心した。父は、なぜかいつものようにグラウンドゴルフに行っていた。

私が二階にいると父が帰って来て、何も喋らず焼酎を持って、自分の部屋へ行った。父はアルコール依存症で、一日中手が震えている。私は生まれてから父と話をしたことはない。父も私とだけは喋らない。父は家にいるときは母とだけ喋る。外でもあらゆる人と口をきく。私はこれではいけないと思い、最近になり父へ話し掛けるようになった。すると父は大声で怒鳴って言葉を返してくる。こんなことなので結局は話は続かない。父は冷たい。いや臆病者だ。

あるとき私は、「お父さん」と言い軽く肩に手を置くと、父は近所中に聞こえるくらいの大きな声で、「あっイテェー」と言い、飛び跳ねて外へ出て行った。

また、あるとき、横に座っている父に「お父さん」と言うと、「あっイテェー」とまた大声をあげた。

これではまるで私が虐待をしているみたいでとても困るので、甲府市の包括支援センターに電話をした。

市の職員はわたしの話を熱心に聞き、これは認知症だと思ったらしく「息子さん、お父さんに隠れて、お父さんの主治医に今のことを話して下さい」と言われた。

しかし、父をどう見ても認知症ではないのだ。この父親は冷たい人である。

私は父のいる部屋へ行き、事情を説明した。私が癌の疑いがあることを父は知っていたのか、それとも知らなかったのか分からないが、「よかったな」と言った。

思えば、甲府市から健康検査の通知が届く日の朝、新聞配達中に赤っぽいカエルを見た。バイクを止めてカエルに近づくとカエルは逃げなかった。カエルの背中を触ると、少しピョンと跳ねた。そしてまたカエルの所へ行き、背中を触るとピョンと跳ねた。私から逃げているような気はしなかった。たしかにカエルは赤っぽかった。暗闇の中、バイクのライトに当たっているせいもあるのだが、赤いカエルを初めて見た。そのカエルが私を生の方向へ誘導してくれたような気がしてならない。

病院で検査をした次の日、新聞配達をしていて、夜空を見上げると星々が素晴らしく美しく見えた。私は生きている。

そう、生きている。毎日毎日平平凡凡と生きていて、生きていることがつまらなかった。生きていることが当たり前だと思っていた。しかし違う。今日生きることが特別であり、当たり前ではないのだ。一日が貴重である。

そんなに父が酒を飲みたいのなら、もう父に対して「酒を飲むな」とは言わない。父に譲ってやる。どうぞあびるほど飲んでください。

死ぬということは楽なことだと私は思っていた。しかし、肩に力が入るし、とても緊張する。死ぬのは怖い。

それから、私は死をとても恐れるようになった。

新聞配達中、アスファルトの道路に赤いカエルが車に轢かれてペチャンコになっているのを見た。もしかしたらあのときのカエルであろうか。そのカエルが「私たちはこのように明日も知れない命を生きています。あなたにはまだ生きている素晴らしい世界がある。それを大事にして私たちの分まで生きていってください」と言っているような気がした。バイクのエンジンをふかした。